

社会インフラマネジメントシンポジウム

開催概要

日時 令和5年2月18日（土曜日）14時～16時

場所 ボルファートとやま

次第

14:00 開会

開会あいさつ：富山市長 藤井 裕久

14:10 基調講演

講師：東洋大学大学院 教授 根本 祐二 氏

14:50 富山市の取り組みについて

説明：富山市 建設部 道路構造保全対策課

15:00 パネルディスカッション

司会：

富山市政策参与 植野 芳彦 氏

パネリスト：

東洋大学大学院 教授 根本 祐二 氏

富山市建設業協会 副会長 石坂 兼人 氏

富山市自治振興連絡協議会 会長 北岡 勝 氏

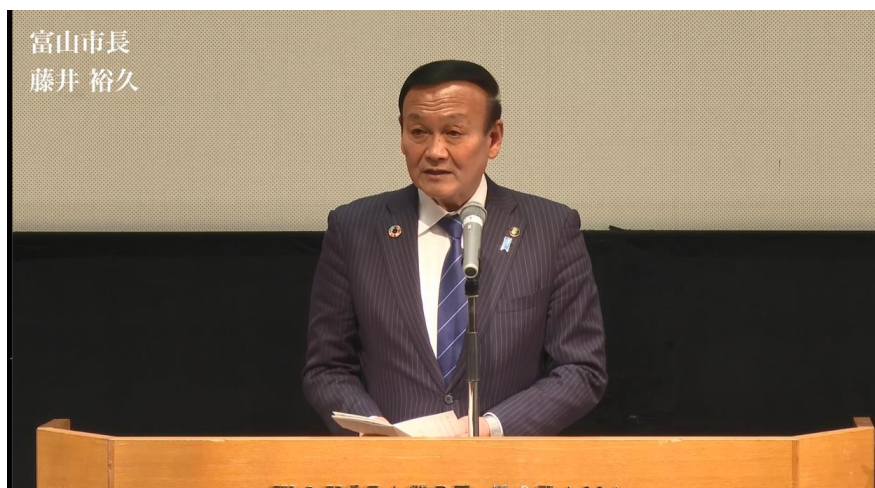
富山市長 藤井 裕久

16:00 閉会



開催内容

【開会あいさつ】



(藤井市長)

本日は、基調講演として、東洋大学大学院の根本祐二教授よりご講演をいただき、パネルディスカッションなどを通じ、参加者の皆様方と社会インフラの現況を共有し、今後について、一緒に考える機会になればと考えております。

【基調講演】



(根本教授)

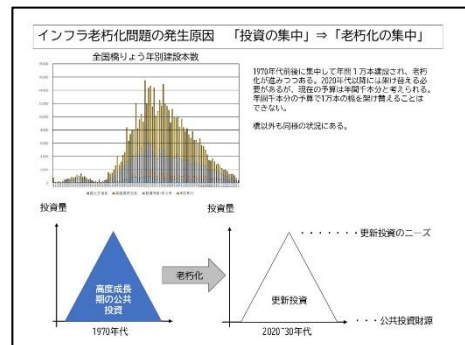
インフラ老朽化問題

- ・ 社会インフラもコンクリートや金属でできている以上は、ずっと使い続けることができるわけではない。何もしないでいると壊れる。
- ・ 今の社会インフラというものは、極めて複合的な構造物であり、全体が老朽化していなくてもごく一部の部品が壊れてしまうと全体のバランスが壊れて倒壊してしまう。一番危ないのは、橋やトンネルである。

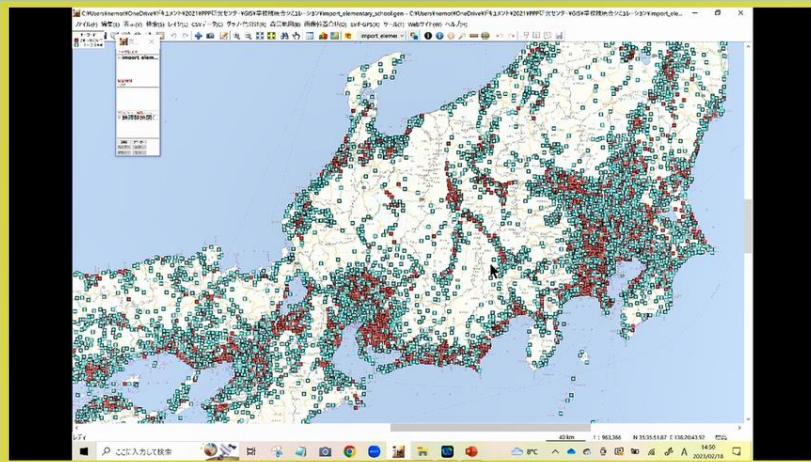
インフラ老朽化問題		
インフラ 公共施設、道路、橋、公園、水道、下水道、港湾、治山治水、エネルギー、交通		
それぞれ、コンクリート、金属、木材などの寿命のある素材でできている 時間が経過すると劣化していき、最終的には壊れる		
種類	障害	概要
公共施設	崩落、倒壊	旧耐震基準時に建設された老朽建物が地震等の際に倒壊する例（東京九段会館、熊本宇土市役所など）、学校耐震化は完了したがいずれ老朽化による建て替えは必要
道路	陥没	表面の亀裂・劣化のほかに地中空洞に起因する陥没事故
橋・トンネル	倒壊	地震時に倒壊する例（鹿行大橋、府領第一橋）、浜松市第一井天橋 2012年笹子トンネル事故を契機に「5年に1回」の点検義務付け
水道	破裂、断水	給水管事故年間2万件
下水道	地中空洞の崩壊	下水道管の老朽化に起因する道路陥没事故年間1千件

インフラ老朽化問題の発生原因

- ・ 社会インフラの更新投資をすべきであるが、予算がない。
- ・ 過去に公共事業に使っていた予算を使おうとしても、現在は、社会保障に使われている。1970年代と比べ、社会保障費は現在、極めて高いウエイトとなっている。
- ・ 社会保障費のレベルを下げれば大丈夫であるが、それをできるとは思えないし、すべきとも思わない。



社会インフラ マネジメント シンポジウム



インフラマネジメントの種類別概要

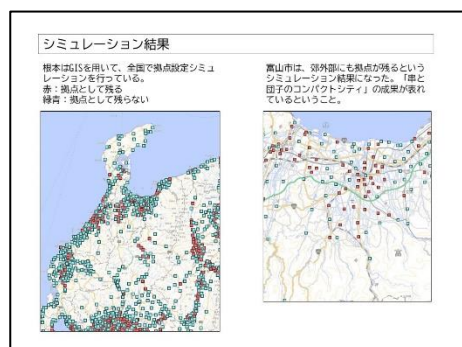
- ・ 小学校を残すことができる人口規模は1万人程度であり、児童数は400人程度であり、1学年で2クラス設置が可能となる。クラス替えが可能。
- ・ 人口1万人であれば、レストランやスーパー、総合病院は厳しいが、民間の病院が設置可能である。
- ・ 商業施設がなくなることが一番困ることとなるので、そのためには、マーケットの規模をまとめる必要がある。それが、人口1万人である。

インフラマネジメントの種類別概要		
種類	拠点	拠点以外
公共施設	広域化、ソフト化のうえで、地域内に拠点を設けて、学校等の公共施設の機能を集約化	デリバリー、バーチャル化
道路	リスクベースマネジメント (重点的に管理)	リスクベースマネジメント (重要インフラ以外は管理レベルを引き下げ)
水道	利用料金適正化	将来的には別方式での給水
下水道	公共下水道 利用料金適正化	合併処理浄化槽

拠点的イメージ
 全国に人口1万人をカバーする拠点を1万箇所設定する
 1万人×1万箇所＝1億人・・・政府が人口を増やしたいとしている目標水準に到達できる
 拠点的場所を小学校と仮定し、全国の小学校を児童数の多い順番に上から1万箇所を拠点的とする
 (1万箇所は現在の約半数であるため約半減、言い換えると半分は残るといえること)
 1万人の標準人口があれば、学校のほか幼稚園(交流)のほか郵便局、銀行、スーパー、病院などが立地可能(日中の労働以上の用は足りる)
 1万箇所の拠点から車で60分以内(スクールバス通学の文部科学省目安)に居住する人口カバー率は98.99%、全国どこでも現在の徒歩15分から車で60分以内で拠点までアクセスできるということ

拠点設定シミュレーション結果

- ・ 富山市の場合は、郊外部にも拠点が残るというシミュレーション結果になった。これは、コンパクトシティ政策の成果が表れてきているということである。
- ・ 全国的には、中心部に集中している都市が多く、こうなると、人々を分散させることが難しい。
- ・ 富山市の場合は、行政の政策もあり、市民自身が、拠点を分散して暮らしていくという選択をしている。拠点をしっかり残すということをしていけば、問題を解決することができる。
- ・ 人口1万人いれば拠点ができる。民間が投資をしてくれて、様々なサービスが提供できるようになる。その様なまちづくりをすることで、この社会インフラの問題を解決するための大きなポイントになるということが、本日の結論である。



【富山市の取組み紹介】



(富山市 道路構造保全対策課)

- ・ 維持管理においては、さらなる業務の効率化や高度化に取り組む必要がある。
- ・ このため、ICT を活用した構造物のモニタリングや、3次元データやドローンの活用を推進しており、これらにより長期的なコストの縮減や、スマートシティの実現を目指して鋭意取り組んでいる。

【パネルディスカッション】



左から、(司会) 富山市政策参与 植野氏、(パネリスト) 根本教授、富山市建設業協会 石坂氏、富山市自治振興連絡協議会 北岡氏、藤井市長

<パネルディスカッションテーマ>

- ① 講演への感想など
- ② 各々の立場でできることは？
- ③ 質疑応答
- ④ まとめ

パネルディスカッション① ～講演への感想など～

(根本教授)

- ・ 我々、人類の生き方、住まい方の問題である。
- ・ 人間が、自分たちの地域でどのように生きていくのか？ということ問われていると、認識してもらう必要がある。



(石坂氏)

- ・ 高度経済成長期のような建設投資はなく、必要性も変わってきている。維持管理、修繕のほうに力をいれていかないといけない。
- ・ 社会構造が縮小していくなかにおいて、我々、建設業界がおかれている立場というものを考えていかなければならない。



(北岡氏)

- ・ 市街地はもとより、中山間地でみられる日本の原風景、里山の美しい姿を、後世に伝えていくためにも、必要最小限の社会インフラの整備促進を今こそ考えていく必要がある。



(藤井市長)

- ・ どの橋を架け替えや長寿命化を行い、どの橋を撤去するのか、厳しい議論になると思うが、市民の皆様とじっくり話し合っていきたい。
- ・ 今を生きている大人の責任として、子どもたちへツケを回さないようにしたい。



パネルディスカッション② ～各々の立場でできることは？～

(北岡氏)

- ・ 住民の立場からすると、まずは社会インフラの課題に対して、優先度を持つべきである。



(石坂氏)

- ・ 建設業界として受け持っている使命感というものが当然ある。
- ・ 激甚化する災害や大雪の時など、建設業界でしかできない支援といったものがたくさんあるが、会社の数が減少するなどすれば、除雪や災害対応ができなくなってしまう。
- ・ 建設業界も富山市の一員として、富山市を守り抜く立場とすれば、社会インフラと業界は一体とならなくてはならない。



(藤井市長)

- ・ 玄関を出たところの除雪は、住民の方々が実施しているなど、富山市には、日頃から意識の高い町内会、自治振興会の方々がいる。このような意識の醸成を図っていくことが、行政の役割であり、仕事かと考えている。



パネルディスカッション③ ～質疑応答～



(質問者)

- ・ 社会インフラについて、将来あるべき姿にしていくためには時間がかかるものと思っている。
- ・ 本日の話を聞き、住んでいる方なども含めて、我々はどうすればよいのか、どういう形で協力していけばよいのか、示していただけると分かりやすいのではないかと思います。



(藤井市長)

- ・ 富山市では、橋りょうトリアージにより長寿命化や架け替えする橋、撤去する橋というふうに関数分けを行ったが、市民への情報提供が不足していると感じている。
- ・ 市民の皆さん自身が、自分の地域の橋の在り方について、「市にとってこれでよいのか」という議論を地域でしていただき、そこに行政も入って一緒に議論していくことが大切かと考えている。

パネルディスカッション④ ～まとめ～

(根本教授)

- ・ それぞれの人や企業に立場があるのは当然であるが、立場の議論をしていると解決しない。解決しないということは、地域が崩壊するということとなる。立場を超えなければならない。そういうこと(地域が崩壊するということ)を望むのかということに煩悶していただかないと、話がまとまらない。
※煩悶(はんもん)・・・悩み苦しむこと
- ・ 一市民として、どう考えるのかをそれぞれが問う。自らを厳しく問うということをして欲しい。
- ・ 最終的に決めるのは、市民の皆さんである。



自らを厳しく問うということをして

(石坂氏)

- ・ 我々は、地域のかかりつけの医者みたいな存在であり続ける必要があると思っている。発注者である市も含め、上手に住み分けをしていきたいと思っている。



(北岡氏)

- ・ 今、日本は超少子化、超高齢化の荒波にもまれている。課題が山積しているとはいえ、優先順位をつけ、必要な社会整備をどうすべきなのか、何をつくり、何を残していけばよいのか、住民の安全を第一にし、住民と行政が一体となって考えていかななくてはならない。



(藤井市長)

- ・ 市としては、現在の財政状況や将来見込みについて、小中学校の再編と同様に、市民の皆様へ数字で将来像を示し、自分事として考えていただけるようにしたい。
- ・ 公共インフラというものは、防災危機管理や消防、救急、住民福祉にも直結する課題であることから、部局横断的に、市全体で取り組んでいかななくてはならない。





(植野氏)

- ・ 橋りょうなど社会インフラに関する課題は、一橋、一橋の話ではない。
- ・ また、富山市だけの問題ではなく、富山県内の市町村と協力していくことが必要となる。
- ・ 現在は、50年以上経過した橋りょうが全体の30数%であるが、2040年になると75%を超える。4つの橋があったら、3つは危ないということである。それをどうするかが、大事な話である。
- ・ これらは、難しい話ではあるが、議論しあうことで、安全・安心な富山市を守り続けることが必要である。

